

# 名古屋

## あの豊田家も一目置いていた 中京財閥、岡谷家の名門力

電力、メディアに鉄道……。名古屋の有力企業の役員に軒並み名を連ねる地元の名家がある。岡谷鋼機の岡谷家だ。時代とともに移り変わる、名古屋の名門の歴史を探った。

### ぽ

つと出の企業を1代で評価することはない。親子、孫と3代続いて、ようやく一人前……。名古屋財界で名門として認められるためには、こんな暗黙のルールが存在する。実績と信頼を何より重んじる名古屋財界において、現在、別格といつてよい存在感を示しているのが鉄鋼商社、岡谷鋼機の岡谷家である。

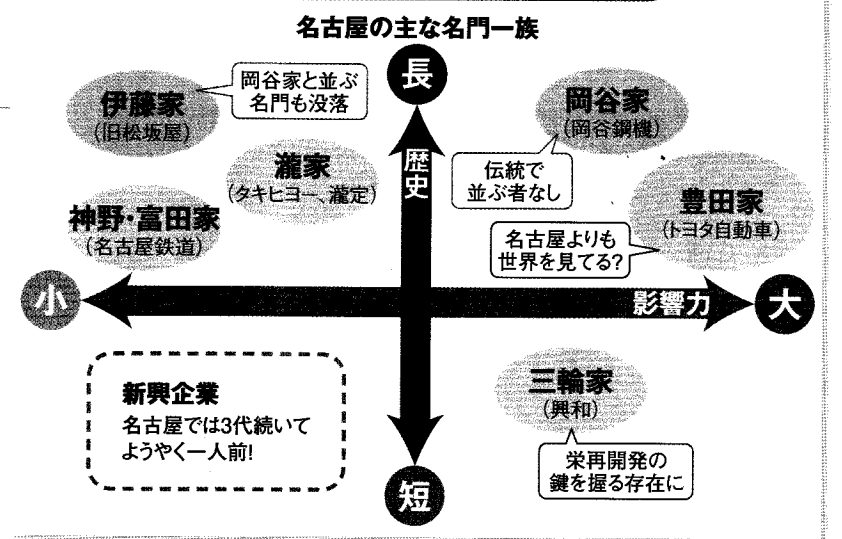
### 中電、CBC、名鉄 有力企業や老舗の 社外役員を兼務

長年の歴史がもたらした岡谷家の強みは、そのネットワークの広さだ。明治時代に近代化の時流を読み、産業用の鋼材へと手を伸ばしたことが功を奏した。地元に多い製造業にとって、岡谷鋼機は古くから資材を卸してくれた大事な取引先。いまや絶大な影響力を誇るトヨタグループに対

治（通称惣助）は「笹屋」の屋号で農具や刃物などを扱う金物商を始めた。以来、一度も場所を動かさずに商売を続け、創業の地に今は岡谷鋼機の本社ビルが立つ。地元の大手企業で、岡谷鋼機に並ぶ歴史を持つ企業はない。名古屋一筋で約350年にわたって積み重ねた実績が、「岡谷と比べれば、トヨタはまだまだひよっこ」と地元で評されるゆえんである。

しても、「鉄が足りなければ売ってあげるよ」と言える、近過ぎず離れ過ぎずの絶妙な距離感を保っている（業界関係者）ことで、地元の信頼を勝ち取っているのだ。また、明治期に銀行の設立に関与したことも大きい。岡谷家は旧東海銀行（現三菱東京UFJ銀行）の前身の一つとなる愛知銀行の設立（1896年）に関わり、初代頭取に9代目岡谷惣助が就任した。このため、明治から昭和にかけて創業した多くの地元企業にとって、岡谷家は親のような存在。もちろん、困ったときに頼るのは岡谷家であり、岡谷が「うん」と言えば名古屋財界の世論が動く。企業は助かり、建たなかったビルが建つ（地元財界関係者）ほどの影響力を持つようになった。

### 分かれた二大名家の命運



実際、岡谷家の影響力は、岡谷鋼機の岡谷篤一社長が兼任する役員から見取ることが出来る。社外取締役や社外監査役を務める企業の一例を挙げてみても、中部電力や中部日本放送、名古屋鉄道といった地元の有力企業や老舗企業がずらりと並ぶ。しかも、こうした企業の多くは、岡谷鋼機と直接の取引関係はほとんどない。地元の名家という理由での役員就任について、財界関係者は「よそから見れば奇妙かもしれないが、名古屋企業にとって岡谷家は『守り神』のような存在だ」と語る。

## これが名古屋の顔だがね

岡谷篤一氏の主な役職

**地元の有力企業**

- 中部電力 社外監査役
- 名古屋鉄道 社外監査役
- 名古屋証券取引所 社外取締役

**岡谷グループ**

- 岡谷鋼機 社長
- 岡谷不動産 社長

**地元の老舗企業**

- 愛知時計電機 社外監査役
- オークマ 社外取締役

**業界団体**

- 名古屋商工会議所 会頭
- 日本銀行 参与\*
- 日本商工会議所 副会頭\*
- 名古屋ビルディング協会 会長

**地元の文化団体**

- 愛知県共同募進会 会長
- 明治村 理事

\*名古屋商工会議所会頭が伝統的に兼務  
\*東京商工リサーチの資料などを基に本誌編集部作成



## 商人エリアは名門の証し

主な名家の店舗所在地



伊藤家15代次郎左衛門祐民の別荘「揚輝荘」は、政財界人の社交の場だった

一昔前まで、この岡谷家と並ぶ名門とされていたのが、松坂屋（現J・フロントリテイリング）の伊藤家である。この名古屋商人の歴史は、1610年の名古屋築城とともに始まる。当時、尾張の中心だった清洲城（愛知県清須市）の城下町を名古屋へと移転させ、「碁盤割」と呼ばれるエリアが商人街となった。伊藤家はこのとき清須から移ってきた店の一つ。翌年店を構えた「いとう呉服店」の場所は、名古屋に最も近い超一等地である。「碁盤割」に入るのには名古屋商人にとって一種のステータスだった」と語るのには「愛知千年企業」の著

者の北見昌朗氏。多くの名門企業を生んだ碁盤割の中で、伊藤家は尾張藩御用達商人の最上位に当たった「三家衆」に格付けされていた。ちなみに岡谷鋼機の創業時は碁盤割に入り込む余地がなく、仕方なく、そのすぐ外側に店を構えた。その地を動かなかったのは意地もあつただろうが、歴史が名古屋を代表する名家へと押し上げた。伊藤家もまた、明治に入り伊藤銀行（後の東海銀行）を設立したほか、名古屋商工会議所の発足に関わり初代会頭に就任するなど、名古屋財界の顔として威光を保っていた。だが、1985年のク

ーターで伊藤洋太郎氏が社長の座を追われて以降、急速に存在感は薄れていき、今では影響力はなきに等しい。江戸時代からの御用達商人である「土着派」の岡谷家や伊藤家と、派閥争いを繰り返してきた名門が瀧家である。幕末から明治初期に名古屋に進出した「近江派」の瀧家はタキヒヨ

が本家で、瀧定が分家。紡績業の発展とともに繊維商社として急成長し、名古屋銀行（後の東海銀行）を設立したほか、滝実業学校（現滝学園）を創立し、地元での名声を高めていった。しかし、繊維産業の没落とともに、財界における瀧家の存在感も低下。かつての影響力は影を潜めている。最近、注目を浴びつつあるのが医薬品などを扱う興和の三輪家だ。百貨店の丸栄や老舗ホテルを買収するなど、名古屋・栄地区の再開発のキーマンと目されている。興和のルーツは、豊田佐吉の盟友だった服部兼三郎が創業した綿布問屋の服部商店。第1次世界大戦後の繊維相場下落で打撃を受けた同社を、当時の番頭だった三輪常次郎が再建し、興和の実権を三輪家が握るようになっていった。名古屋財界で現在、大きな影響力を持つのは「新興三家」と呼ばれるトヨタ自動車とJR東海、中部電力。ただ、豊田家は「1950年の経営危機以降、名古屋財界と距離を置いている」（財界関係者）。トヨタ出身の名商會頭は愛知万博前の磯村巖氏だけだ。時代とともに移り変わる名古屋財界の実力者たち。歴史を耐え抜いた岡谷家に、地方の名門の在り方を学ぶことは多そうだ。